

名古屋外国語大学論集 第8号 2021年2月

論文

魯迅翻訳『思想・山水・人物』（鶴見祐輔著）についての覚え書（下）

关于《思想・山水・人物》（鲁迅译，鹤见祐辅著）的札记（下）

中井政喜

Masaki NAKAI

1. はじめに
2. 作品翻訳の時点による時系列と未翻訳作品
3. 翻訳された諸作品の4つの時期
 - 3.4 時期Ⅲ（1927年4・12反共クーデター以後、1928年1月「革命文学」論争の開始以前）の翻訳作品（1927年10月、広州から上海に行く）（以上前号）
 - 3.5 時期Ⅳ（1928年1月「革命文学」論争の開始以後、1928年4月3日『思想・山水・人物』訳了まで）の翻訳作品（上海に居住）（以下今号）
4. さいごに

3. 翻訳された諸作品の4つの時期

- 3.5 時期Ⅳ（1928年1月「革命文学」論争の開始以後、1928年4月3日『思想・山水・人物』訳了まで）の翻訳作品（上海に居住）

3.5.1 この期間（時期Ⅳ）に訳出された諸作品と概要

この期間に訳出された諸作品と概要は以下のとおりである。

- ⑬「読書の方法」（全10章、第144頁～第154頁、全11頁、1923・8・14、「読書的方法」）

読書をどのようにすれば、精神の浪費が少なく、効率よく啓発を得て、内容の深義を把握できるかについて、作者（鶴見祐輔）は実際的な4つの方法を紹介し比較する。1. 朱線を引く、2. 抜粋帳を作る、3. 再読する、4. あらかじめ概略を把握した後に読書する。作者は、朱線を引き、批評を書きこみ、線の部分を後に再読するのが自分の読書法だとする。

⑭「執務法について」（全1章、第155頁～第160頁、全6頁、1923・8・26、「論辦事法」）

多くの英雄は細心な事務家であったが、ただそう見えただけである。英国植民省の敏腕の官吏サー・ヘンリー・テラーによる、経世家の事務面についての心得を8項目にわたって紹介する。例えば、1. 書類を受けとったらただちに整理分類する、2. 無用に書類をいじらない、3. 或る事務を処理するときには、これに集中し、他事を忘れる、5. 字を書くときはゆっくりと書く、等々の8項目である。



『思想・山水・人物』（上海北新書局、1928、北海道大学図書館所蔵本）の表紙、周囲は補修されている

⑮「訪れてゆく心」（全10章、¹第160頁～195頁、全36頁（写真1枚、1頁分含む）、日付なし、「往訪的心」）

旅は自分自身を考え、自分自身を新たに知る魅力がある。その契機は様々である。米国フロリダ州の雨の夜、作者（鶴見祐輔）は埠頭で船を待ちながら、米国人男性が夢中で語る話を聴いた。米国が四民平等であり、ニューヨークの教育が無料であること、自分は貧しい家の生まれであるけれども、大学まで無料で教育を受け、仕事をしている。「南方の黒ん坊か何かなら兎に角」、みんな文字を知っている。不平を言うものはたいてい怠け者である。まるで米国自身が闇から出てきて話しているかのようであったと言う。（「3. 旅の収穫」）また、ウィルソン大統領に面会するとき、秘書官にいったん阻まれたが、ウィルソン夫人をとおして実現した。秘書官の任務について、主人を思う誠実さを感じたとする。（「6. ウィルソンの秘書官」）作者（鶴見祐輔）はウィルソンの研究を志し、資料を集め、ゆかりの地を訪問した。アトラン

タはウィルソンが大学卒業後に弁護士事務所を開いた場所である。そのとき稼業がまったりはならず、そのためにさらに勉強をして学者となり、政治界に入ったという因縁が紹介される。（「7. 雨のアトランタ」）作者は当時、大統領候補としてにわかに話題となった、快漢ラ・フォレットを訪れた。（「8. ラ・フォレット」）また、一高の学生時代に、校長新渡戸稲造先生の家にごちそうになり、そこで、米国から帰国し、札幌農学校に赴任する若い有島武郎と同席したことを述べる。有島武郎は新渡戸先生の自慢の教え子であった。（「9. 新渡戸先生（上）」、「10. 同（下）」）

⑩「指導的地位の自然化」（全6章、第207頁～第220頁、全14頁、1923・6・28、「指導底地位的自然化」）

第一次大戦後、民衆は平和の達成を約束した政治家の発言が嘘だったと思い、指導層が地位を失った。人類生活は協力が必要であり、各分野において上下関係でない指導と服従によって、目的を達成する。政治的指導者とは、政治の分野でのみ目的を達成できるような能力をもった人である。この政治的指導者が職業化しやすい恐れがある。我々は真実の政治的指導者には整然と従い、他方、職業化した政治指導者層を一掃する必要がある。



『思想・山水・人物』（上海北新書局、1928、北海道大学図書館所蔵本）の中表紙

⑪「曾遊山河」（全6章、²第285頁～第310頁、全26頁、日付なし、「旧遊之地」）

かつて訪ねた名跡に関する紀行文である。パリにある英国王エドワード七世の銅像を訪ね、国王の人柄、親独政策から親仏政策への外交の転換等が語られる。（「1. エドワード七世街（上）」、「2. 同（下）」）米国第3代大統領ジェファースンの隠棲の地を新渡戸稲造とともに訪ねた。ジェファースンは米国の民主主義が広大な自由土地のある限り成立しようと考えたとし、いま米国は工業時代が始まり、時代が転換しつつあると言う。（「4. モンチーチェロの山荘」）また、スターントンにあるウィルソン大統領の質素な生家を訪

れた。「〔5. スターントンの二階家（上）〕」、「6. 同（下）〕」また、オランダのユーゴー・グローシアスは自由公海論を唱え、国際的な仲裁裁判の創設を訴え、国際法の基礎を作った。作者（鶴見祐輔）は不遇のうちに亡くなったユーゴー・グローシアスの銅像を、オランダのデルフトの街に訪れたこと等を紹介する。（「8. デルフトの立像」）

⑱「自由主義について」（全11章、第273頁～第284頁、全12頁、1924・7・4、「説自由主義」）

作者（鶴見祐輔）はさらに自由主義研究を志しているため、いま考える研究の到達点を述べようとする。少年のころは自由主義政治家のグラッドストーンの伝記等を読み感奮し、同時にこれに反対するデズレリーの伝記を読み感動して、二つの考えが自分の胸中にあった。³大学を出た頃から自由主義の政治家ウィルソンに共鳴し、第一次大戦ころから独逸に欠けていたものは自由主義であり、ロシアが社会革命に奔ったのも、自由主義の不存在のためであると考えた。自由主義の方が、社会主義よりも進んだ考えだとした。日本の現状を見たとき、思想的には雑多で混乱し、しかも思想の異なる人々の間では、寛容と公平を欠いていた。⁴日本に必要なものは自由主義だと確信した。モーレー卿は、フランス啓蒙思想家を英国に紹介し、英国の固陋な旧思想と戦った。作者（鶴見祐輔）はそれにならい、自由主義の思想を闡明にするために、自由主義の史論を展開することを自分の研究の目標とする。18世紀のフランスから、19世紀の英国、20世紀の米国へと、自由主義をたどることにした。現在作者（鶴見祐輔）が考えている自由主義の定義は、社会主義のような或る原則の定まった主義ではなく、心の形（心持ち）であるとする。自由主義の中心思想は、平等主義の思想ではない。自由主義は、社会における人間の人格を認め、人格の完成を目的として、その目的のために社会を作ろうとする社会思想である。こうした自他の人格の完成を目指す自由主義は、その障碍を打破しようとするが、社会を破壊するものではない。自由主義は寛容であり、あらゆる分野の専制に反対する。各個人は、自分の能力を発揮し、正統な欲求を満足させ、自由に思想し、自由に表現し、自由に行動する。

⑲「旅ということ」（全4章、第412頁～第417頁、全6頁、1923・2・25、「説

旅行」]

英国で新聞経営者として活躍したノースクリフ卿が、豪州から日本へと島伝いに旅したときの、南海の美しい紀行文を紹介する。また、作者（鶴見祐輔）は英国を偉大にしたものは旅であるとし、古の人は旅で考え、いまの人は旅で読む。第一流の人は旅で宇宙の大文学を見んとする。

⑳「紐育の美術村」（全1章、第417頁～第424頁、全8頁、「紐約的美術村」）

米国は画一的な国で、全国どこでも同じものに会おう。しかしこの単調を破るものが、紐育の南、ワシントン・スクウェア広場の周囲の、グリーンチ・ヴィレージという一画である。その一画は芸術家の卵の青年たちが巢喰うところで、彼らはそこにある得体の知れないような料理店やカフェーに集い、議論し暇をつぶしたりする。作者（鶴見祐輔）は、何度かそこを訪れた印象を記している。

『思想・山水・人物』（前出）の作品の翻訳は以上である。なお、翻訳の意図を探るうえで重要な文章、「『思想・山水・人物』題記」が、「2、題記」（1928・3・31、「関于『思想山水人物』」、週刊『語絲』第4巻第22期、1928・5・28）として発表され、この本を出版するについての説明を行っている。

3.5.2 時期Ⅳの状況と翻訳意図

（1）鶴見祐輔の「自由主義」に対する魯迅の受けとめ方

では、当時の中国の社会的政治的状況と魯迅の思想状況を踏まえながら考えると、1928年1月ころ当時、魯迅は鶴見祐輔の「自由主義」に対してどのように考えていたのだろうか。1927年10月、魯迅は上海に来た当初、国共合作の統一戦線による国民革命の挫折後の、南京国民政府の過酷な圧制の下で、思想的に新しい道を見つけること、中国改革について新たな道を見つけることが困難な状態にあったと思われる。魯迅は、1928年1月ころから左翼の中国革命文学派から激しい批判を受けたとはいえ、しかし他方、清朝末期から中国を侵略し、中国を塗炭の苦しみに陥れた当の大英帝国における、そこでの「自由主義」に対して決して単純な思いではなかったと思われる。魯迅は英国をはじめとする帝国主義に侵略された側にあり、そこから考えて、

鶴見祐輔のように、英国、米国の「自由主義」に共鳴し賞賛し、そこに疑問なく傾斜することはできなかったと思われる。例えば、1924年、英国に労働党内閣が実現したにしても、香港の植民地支配は継続しており、中国内地の英国租界も維持されていた。1927年9月、香港における白人配下の同胞の検査は魯迅の体験したとおり手ひどいものであった。⁵そこに、帝国主義の支配を受ける被支配者・被抑圧者側の楽観の存在を許す状況はなかった。(蒋介石と国民党右派は、1927年4月12日、国民革命を裏切り、列強の帝国主義と妥協して、左翼勢力を弾圧し、政治権力を把握した。⁶)

例えば、魯迅は、「論〈費厄潑頼〉應該緩行」(1925・12・29、『墳』所収)でフェア・プレーに反対した。それはフェア・プレーの価値を認めなかったのではなく、二重道徳の存在する中国の現状において、敵方に対してそれを無差別に適用することが、かえって中国の状況を悪化させ、次代の青年たちにいっそう大きな困難を背負わせ、中国の将来の展望をいっそう難しくすることを危惧したためであった。また、魯迅には辛亥革命時の体験があった。辛亥革命が清朝を打倒したとき、革命派の「文明」的態度によって、反革命派は再び這いあがり、のちに袁世凱の支配の下で多数の革命人を逆に殺害してしまった。魯迅はフェア・プレーとその寛容の価値を理解していたけれども、当時の中国の社会的政治的状况において、フェア・プレーとその寛容を無差別に適用する結果が、すなわちそれがもたらす悪い作用を予測して反対し、時期尚早とした。

また、1925年ころからの女師大事件において、中国で「自由主義」者を称する英国留学経験者、北洋軍閥政府の教育総長章士釗や北京大学教授陳西滢等に対して、魯迅は厳しく対立し、熾烈に論争した。彼らを「芝居をする虚無党」とする魯迅は、⁷中国での「自由主義」と「自由主義」者を、また彼らのフェア・プレーに対する態度を、容易く信頼しなかったと思われる(当時『語絲』で魯迅と協力し信頼関係のあった林語堂のような自由主義的知識人も存在したとしても⁸)。

魯迅はまた例えば、『書齋生活与其危険』訳者附記(1927・6・1、半月刊『莽原』第2巻第12期、1927・6・25)で次のように言う。

「作者〔鶴見祐輔〕は書齋生活者が社会と接近することを求めている。その意図は〈世評〉を知って、自分の意見をとおす意固地な思想を改めさせることにある。しかしこの意味は完全なものではないと思う。第一に、先ずどのような〈世評〉であるのかを見なければならぬ。もしも腐敗した社会であれば、そこから生みだされるものも当然腐敗した世論にすぎない。もしもそれを引いて鏡とし、自己を改めるならば、その結果、悪事に染まるのでないとしても、必ずや如才ないものと変わるだろう。私の意見によれば、公正な世評は人を謙遜にさせる、しかし不公正な或いはデマ式の世評は、人を傲慢に或いは皮肉にさせる。さもなくば彼はきっと憤死するか、或いは圧迫されて死にいたる。」

魯迅は、書齋人と世評に関する鶴見祐輔の論を原理論として一部分認めながら、しかし具体的な例として、「腐敗した社会」の腐敗した世評であれば、それに従った場合、人を如才なくさせるにすぎない。また、不公正な或いはデマ式の世評であれば、「人を傲慢に或いは皮肉にさせる。さもなくば彼はきっと憤死するか、或いは圧迫されて死にいたる」、とする。

魯迅は、フェア・プレーにしろ、「自由主義」にしろ、世評にしろ、それらを評価する場合、一般論、原理論としての価値とはべつに、中国の現状に基づいて、具体的に適用した場合の現実的作用と社会的価値を考察し評価したと思われる。

また、平等主義との関連で、鶴見祐輔は「自由主義について」の一文で次のように主張する。

「ブリーズはこれを論じて、自由主義とは、他人を自己と同等の価値ある者と見るの性情を言う、と為し、進んで、『自由主義者は、常に他の人々に対し自己表現並に自己発展のために自分と均等なる機会を与えんと欲す』と言っているが、これは必ずしも、余の賛成し兼ねるところである。斯の如きは自由主義の中心思想を、平等思想となすものである。自由が一転して平等となるは寧ろ派生的結果であって、中心思想ではない。」（280頁）

鶴見祐輔はブリーズの意見に反対し、自由主義の中心思想が平等主義ではなく、平等は派生的結果であるとする。鶴見祐輔の自由主義は、社会における

人間の人格を認めること、という人格主義的な色彩を帯びる。

魯迅はこの点について、『『思想・山水・人物』題記』（1928・3・31、前出）で、「作者の専門は法学で、この本の帰趨は政治であり、提唱するところは自由主義である。私はこれらについてははっきりとは解らない。」（119頁）としながらも、次のように言う。

『『自由主義について』の1篇も、別に私の注意を払う文章ではない。私自身はむしろ、ゲーテの言うところの、自由と平等はあわせ求めることができないし、あわせ得ることもできないという言葉に、いっそう見識があると思う。⁹だから人は先ずその一つを取るしかない。しかしそれはまさに作者の研究し憧れるところのものであり、この本の本来の姿を失わないために、特にその1篇を訳した。』（119頁）

すなわち魯迅は、自由と平等はあわせ求めることができないとし、どちらを先ず選んで求めるのかとしたら、鶴見祐輔とは違い、平等を取るとしたと推測できる。この立場から、上の発言をしていると思われる。二者択一の場合、魯迅が平等を先ず取るとしたのは、以下の理由によるとと思われる。

魯迅は「再談香港」（1927・9・29、『而已集』所収）で、広州から上海への途次、香港で英国の白人配下の同胞による手ひどい荷物の検査を受けたことを言い、中国の将来図を示す。

「香港は一つの島にすぎないけれども、中国の多くの地方の、現在と将来の肖像写真である。中央には外国の主人がおり、手下は徳を讃える若干の〈高等華人〉と、悪の手先を務める奴隷根性の同胞である。その外はすべて黙々と苦しみを嘗める〈土人〉であり、耐えることができるものは洋場〔租界地〕で死に、耐えることができないものは深山に逃げはいる、苗族、瑶族が私たちの先輩である。」¹⁰

中国は、当時その一部が外国帝国主義によって植民地、租借地とされ、そこにおいて中国人は支配と抑圧、差別を受けた。魯迅が外国帝国主義による支配と抑圧、差別を受ける側にあった中国の知識人であったことに注意したい。鶴見祐輔は、『『思想・山水・人物』（前出）においてアフリカ系米国人を「黒ん坊」と言及し、彼らをほとんど眼中に置いていない筆致がある。米国にお

ける紀行文で、鶴見祐輔はほとんど支配階層の白人の目と同じ位置で、米国の物事を見ている。¹¹しかし魯迅は、列強の帝国主義の侵略を受けた中国で、香港における実際の英国帝国主義の支配、その象徴としての白人支配と配下の同胞のふるまいも経験した。魯迅は当時の中国社会において自由の価値、「〈自由主義〉の精神」を擁護するものであったけれども、¹²上述の経験等のゆえに、自由と平等の二者択一が余儀ないとすれば、平等の方を先ず選択していると思われる。上のような意味で、鶴見祐輔の「自由主義」に対する距離が『『思想・山水・人物』題記』（前出）に述べられていると思われる。

（2）中国革命文学派の批判に対する反批判の心情

1928年1月、「芸術与社会生活」（『文化批判』第1号、1928・1・15）で馮乃超^{ふうないうちやう}は頭ごなしに全否定するように、「人道主義」を批判し、人道主義者、小資産階級作家として魯迅、周作人等を激しく批判した。「〈醉眼〉中の朦朧」（1928・2・23、原載『語絲』第4巻第11期、1928・3・12、『三閑集』所収）において、魯迅は中国革命文学派の批判に対する反批判を行う。

「革命者は決して自己を批判することを恐れない、彼ははっきりと知り、明言する勇氣がある。ただ中国は特別であって、人に付いてトルストイが『うす汚い説教者』であると言うことは知っているが、中国の『現在の情況』に対しては、ただ『事実上、社会の各方面もまさしく暗雲垂れこめた勢力の支配を受けている』と考えるだけで、トルストイが『政府の暴力、裁判行政の喜劇の仮面をはぎとった』勇氣の数分の一さえもない。人道主義の不徹底を知っているが、しかし『人を殺すこと草のごとくして声を聞かず』というとき、人道主義式の抗争さえもない。」

馮雪峰^{ふうせつぽう}は、『回憶魯迅』（前出、1952・8）で1929年ころの魯迅の言葉を紹介する。

「『みんなは今また人道主義を悪く言っています。しかし私が思いますに、反革命者が革命者を大殺戮しているときに、もしも真の人道主義者が現れて抗議するならば、これは革命に対してどうして損失になるのでしょうか。……私は人道主義者が身を挺して現れるのを見たことはありません。しかし人道主義を悪く言う人たちもなぜ驚いて一言もあえて言わないのでしょうか。ある

いはほかの良い方法を考えなかったのでしょうか。……私が思いますに、中国にはおそらく真の人道主義者はいません、ほかの良い方法も考えつかなかったようです、はっきりとした直接的な闘争以外には。もしも一方で人道主義を悪く言い、他方ではまた闘争しないとしたら、これはどういう主義であるのか、分かりません。』

1927年半ばごろ、魯迅は生命の危険があった広州で、左翼勢力に対する蒋介石と国民党右派による弾圧と殺戮に対して、できる範囲での抗議の気持ちを、二つの形式（陰画と影絵）や口ごもった言葉等をとおして表した。¹³

他方、中国革命文学派馮乃超等は、1928年初めころ無産階級革命文学を提唱するなかで、左翼勢力に対して過酷な圧制を行っている主たる現実の敵（南京国民政府、その御用文学者、御用知識人）を厳しく批判することなくして、人道主義者、小資産階級作家として魯迅や周作人等の方を、口を極めて激しく批判した。また、1927年4月4・12反共クーデターの時期において蒋介石と国民党右派が左翼に対する弾圧と虐殺を現に行っているとき、1928年に人道主義をのしる馮乃超等が、1927年のそのとき人道主義者ほどの抵抗もしなかったことを、魯迅は指摘する。こうした主敵を放置して小資産階級作家を激しく批判する中国革命文学派に対して、上記のような魯迅の厳しい揶揄があり得た。

こうした点から言えば、『思想・山水・人物』（前出）の1928年1月以降のこの時期の翻訳と、その後の全体の出版は、中国革命文学派が主敵を放置しながら、人道主義者・小資産階級作家魯迅等に対する集中的批判をおこなうことに対する揶揄の意味があった。そして『思想・山水・人物』の出版については、『而已集』と同じような意図も含まれた出版であったと思われる。すなわち、蒋介石と国民党右派の「大きなベテン」と圧制に対する、当時の抗議の記録を残すことでもあった、たとえそれが口ごもった、当の抗議の相手に伝わりにくいものであったにしても。またそれは、1927年当時左翼勢力に対する弾圧と虐殺を行う蒋介石と国民党右派に何の抗議もせず、人道主義的な抗議すらもせず、1928年1月においても、南京国民政府の圧制に抗議を示すことなく、むしろ人道主義者、小資産階級作家として魯迅等を集中的に批

判し激しく詰めよる中国革命文学派に対する揶揄を意味するものであったと思われる。

また、「執務法」（前出）について、「題記」（1928・3・31、「魯迅于上海寓楼記事」とある）の中で次のように言及する。

「例えば本書の『執務法について』は極めて普通の短文であるが、しかし私には多くの裨益を与えた。私は平素物事をするのに、一つが終わらないと、いつも時々刻々心に残存して、このために困憊しやすかった。その一篇はこのような性癖の良くなく、物事に凝り固まるべきでないことを示す。私は、これが何をするにおいても見習うことができると思う。しかし決して中国の祖先伝来の〈物事をいいかげんにする〉、すなわち〈ふまじめ〉と混同してはならない。」（120頁）

この時期の作品の選択には実用的な文章が含まれ、このほか「読書の方法」も実用的な内容である。

そのほか、「読書雑談——7月16日在広州知用中学講」（『而已集』）は知用中学の学生に対する講演である。魯迅はこのなかで、「旅ということ」（前出）の中のカーライルの言葉を引用して述べていると思われる。¹⁴

4. さいごに

4.1 『思想・山水・人物』の翻訳意図について

『思想・山水・人物』（前出）には、英国の「自由主義」政治家が英国政治史のなかで、様々な具体的問題に対してどのような政策を採ったのか、は述べられていない。また、ウィルソン大統領がその理想主義を具体的問題に、どのように政策として実現したのかについて、それを語るものでもない。『思想・山水・人物』（前出）が述べるのは、「自由主義」政治家の風貌、人間性、考え方、その人生の経歴であり、「自由主義」を「心持ち」の問題とし、その内容を、社会における人間の人格を認めるものとする、人格主義的抽象的なとらえ方である。すなわち『思想・山水・人物』（前出）は、英米の自由主義を具体的問題について政策的政治理論的に分析して示すものではなく、鶴見祐輔の言及のとおり、自由主義的政治家の風貌、人間性、考え方、その人生

の経歴を紹介する、基本的に「随想」であったと思われる。

中国は1920年代から30年代にかけて社会的政治的に激動の時代にあり、また魯迅は中国の社会的政治的激動の状況に直面して生き、文学・思想活動を行った。その激動する社会的政治的状況の変化と自らの思想的変化によって、『思想・山水・人物』（前出）の翻訳の意図は、一貫した部分があると同時に、3年間のなかのそれぞれの時期において変化する部分があり、異なった傾向の翻訳作品が選択され出現したと考える。それゆえに、小論は翻訳の時期を4つの時期に区分し、それぞれの時期における『思想・山水・人物』（前出）の翻訳の意図を探ってきた。

時期Ⅰ 1925年から1926年3・18惨案以前（北京に居住）

時期Ⅱ 1926年3・18惨案以後、1927年4・12反共クーデター以前（1926年8月、厦門へ移る。1927年1月広州へ移る）

時期Ⅲ 1927年4・12反共クーデター以後、1928年1月「革命文学」論争の開始以前（1927年10月、上海に移る）

時期Ⅳ 1928年1月「革命文学」論争の開始以後、1928年4月3日訳了まで（上海に居住）

1925年ころ当初の翻訳をしはじめたころ、魯迅は『思想・山水・人物』（前出）の諸作品の中から、中国旧社会に対する「〈文明批評〉と〈社会批評〉」（『魯迅景宋通信集』一七、前出）を行う魯迅自身の関心をひく作品を選んで、紹介をはじめた。

1926年3・18惨案以後のころから、ミルの言葉の引用に見られるように、旧社会に対する反抗、北洋軍閥政府の凶暴な権力による様々な圧制に対する抗議、抵抗という意味が、翻訳にこめられた。

1927年4・12反共クーデター以降、蒋介石と国民党右派の弾圧と殺戮、その政治権力の圧制に対して、自らの生命の危険もあるなかで、魯迅はその意図が判別しにくい形式（陰画の形式）をもって、抗議の気持ちを秘かにこめて翻訳したと思われる。

1928年1月から、上海において、中国革命文学派の激しい魯迅批判が行われる。馮乃超等は人道主義に対する頭ごなしの全否定的批判、小資産階級作

家魯迅、周作人等に対する激しい批判を行った。それに対する一つの行動として、魯迅は『思想・山水・人物』（前出）の翻訳書を出版した。そのことで、人道主義者・小資産階級作家の魯迅が1927年に行ったほどのささやかな抗議も、当時の創造社成員は行わなかったし、1928年においても、中国革命文学派（第三期創造社、太陽社）は主敵である南京国民政府の圧制に対して十分な批判を行なうことなく、むしろ小資産階級作家魯迅等に批判を集中させていることを示して、揶揄したと思われる。（言うまでもなく、中国革命文学派に対する魯迅の理論的な反批判は、これに止まらない。）

同時に、『思想・山水・人物』（前出）を出版するときに魯迅は、鶴見祐輔がこの本で言いたかった核心の文章「自由主義について」を翻訳してつけた。それは鶴見祐輔の本の趣旨を尊重するものであった。そして魯迅は『『思想・山水・人物』題記』を書き、鶴見祐輔の「自由主義」の唱導に対して、二者択一の場合、「自由」と「平等」のどちらかを選択するとすれば、むしろ「自由」よりも「平等」を先ず選択する旨を述べた。アヘン戦争（1840年）等によって、中国人として魯迅は、歴史的に帝国主義による被侵略者被支配者の立場にあった。たとえば魯迅は香港で英国帝国主義支配下の、白人配下の同胞による被支配者被抑圧者（中国人）に対する手ひどい検査を受けた。外国人が上で支配し、その周りに高等華人、奴隷根性の同胞の手下がおり、さらにその外側に多くの中国人（「土人」）が苦痛を嘗めている。香港はそうした中国の将来図であると考えた。ゆえにこうした状況下にある魯迅は、二者択一の場合、鶴見祐輔の「自由」主義を選択せず、「平等」を先ず選択し主張したと思われる。（上述のように、魯迅は前期、後期をつうじて、自由の価値、「〈自由主義〉の精神」を擁護するものであった。）

魯迅はまた、鶴見祐輔の「世評」を尊重することについて、中国という腐敗の多い具体的な社会状況を念頭におき留保をつけた。魯迅は原理論としての価値とはべつに、中国の現状に基づいて、具体的に適用した場合の現実的作用と社会的価値を考察し評価した。

このように魯迅は、『『思想・山水・人物』題記』等によって自分の翻訳意図の一部が或る程度明確になるようにして、『思想・山水・人物』（魯迅訳、

北新書局、1928・5）を出版したと思われる。

4.2 未翻訳の諸作品（11篇）について

そのほか、翻訳されなかった諸作品の概要は以下のとおりである。翻訳された諸作品については、翻訳がなされた時期の社会的政治的状况と、その時期における魯迅の思想的状况を手がかりにして上述のように推測を進めた。しかし翻訳されなかった諸作品については、魯迅が翻訳をしないと意志した時期（入手した時期から翻訳終了までの間において）を特定できず、手がかりがいつそう不明となる。そのため、概要のみを記すにとどめる。

4.2.1 未翻訳の諸作品（11篇）の概要について

⑪「失意と修史」（全6章、第94頁～第101頁、全8頁、1923・8・10）

失意の政治家が偉大な歴史家となる例がある。それには、歴史家としての見識、思想、文章の技術の3条件がなければならない。彼らは人生の半ばを政治家として過ごしているために、世相の表裏までよく知っていた。また、彼らには失脚のために世を怒り私情に流されることがないような、冷静さがあった。

⑫「人物月旦ということ」（全2章、第102頁～第109頁、全8頁、1922・8・9）

人物月旦（人物批評）は、その人物の事実を如実に書いていなければならない。人生50年、一人の人が同じ性格であることはありえないし、その生涯は矛盾と撞着に充ち、矛盾撞着が人間の真の姿である。¹⁵ ストレッチーのヴィクトリア女皇伝は周りの人物を含めて活写されている。

⑬「洋行の前と後と」（全1章、第196頁～第202頁、全7頁、日付なし）

海外に留学に出かける人への饯別の言葉として書かれている。人は海外留学に出かけるとき、過度の大きな希望をもってはならない。ごく具体的、卑近な目的を立て出発するのが良い。大きな希望、遠大な計画はその人を焦慮煩悶させ、帰朝するときに良心の呵責に遇うことになる。また、帰朝後、自分の修業が認められず、深い失望を味わう人は、利己主義の変物と化し、隠

遁者のようになる場合もある。帰朝後の失望は、自己の進境が著しかったためだと考え、自らを鼓舞すべきだと言う。

②④「富士山が見える」（全4章、第202頁～206頁、全5頁、1923・11・23）

関東大震災（1923・9・1）の後3ヶ月ほどの時に書かれた文章である。その頃、東京のいたるところから、さえぎるものがなくなり、富士山が見えるようになった。それは、あたかも人生の行路に悩んだ人が、突然あるべきものを見ることができるようになったことに似ている。ウィルソン大統領は、大きな政治上の問題に直面するたびに、自身の内面にあるアメリカ人平民の意見に耳を傾けた。それはいつも、ウィルソン大統領にとっての富士山であった。

②⑤「帝都の復興」¹⁶（全4章、第220頁～第232頁、全13頁、日付なし）

壊滅状態に陥った東京をどのように再建するのか。作者（鶴見祐輔）は、古代ギリシャの政治家の言葉、「幸福は勇氣より生れ、勇氣は自由より来る」を引用する。人間らしい幸福な生活を再建するためには、勇氣が必要であり、その勇氣は、自由な不羈の精神から生まれるとする。東京再建の計画は、市民に自由な環境を与えることでなければならない。それには人々の創造的精神が発揮されるべきである。また、旧東京のように、交通機関や設備が不便なものであってはならない。千年先を見とおした、発達の萌芽をもった都市計画であるべきだ。

②⑥「文学と政治との岐路」（全5章、第242頁～第247頁、全6頁、1924・6・30）¹⁷

グズレリーは文才を持ちながら、政治に専念して大宰相となり、英国の帝国主義を完成した。モーレー卿はアイルランド問題に目鼻をつけ、インド問題に一光明を投じ、自由主義政治家として力を発揮し、文筆家として15巻のモーレー全集を残した。ひるがえって、日本の社会は余りにも切羽詰まった社会であり、政治家は文学的才能を伸ばす環境におかれていない。¹⁸

②⑦「国境生活者」（全5章、第248頁～第253頁、全6頁、1924・6・30）

偉大なる発見は非専門家からでることが多く、いわゆる専門家はかえって人文発達の障害になっていることが多い。専門化が専門学問の発達の障害と

なっている。専門家は真理を中心にばかり求めて行き詰まることが多い。専門家は国境生活者にもっと注意と敬意を払うべきである。

⑳「紐育より南へ」¹⁹（全12章、第310頁～第340頁、全31頁、日付なし）

紐育からワシントンへ、さらに南にフロリダ州のパーム・ビーチまで旅した紀行文である。人間は事実の上に生活せず、偏見の上に生活する。旅は偏見から人を抜けださせ、事実を認識させる。年末にアメリカ人の友人（作家）の案内で、ワシントンで政界人と接触した。その中には、若い上院議員や、日本最良の女史、昔米国一の美女と言われた伯爵夫人もいた。作者（鶴見祐輔）の友人の作家は賢夫人に恵まれ、ハーディング大統領の下で、その後イタリア大使となった。作者（鶴見祐輔）はクリスマスの夜、ワシントンから南に下り、ジョージア州都サヴァンナ、フロリダ州の避寒地セント・オーガスチンを観光して、さらに南のパーム・ビーチにきた。²⁰

㉑「南の思い出」²¹（全12章、第341頁～第365頁、全25頁、1923・8・26）

4年前の冬、作者（鶴見祐輔）はワシントンで流感にかかり43度の高熱を出した。その休養のためもあって、男性3人でフロリダのパーム・ビーチに避寒に行く。パーム・ビーチに近づくと、南国の薫風が吹いていた。空はぬぐったような藍色、地は一面に緑であった。ローヤル・ポアンシアーナ・ホテルに宿泊する。パーム・ビーチは米国の富豪たちが1月と2月を避寒して過ごす社交地であった。椅子車に乗ってホテルの周りを回る。広い廊下で籐椅子に腰かけ、ウェルスの小説『熱狂の友』を読んだ。マイアミまで自動車が出かけ、途中、まるで映画のように急行列車との競争がはじまった。滞在は延びて、1週間ほどしてから紐育に帰った。

㉒「秋の軽井沢」（全8章、第366頁～第380頁、全15頁、1923・10・31）

東京の壊滅した大震災の2ヶ月後、作者（鶴見祐輔）は軽井沢の紅葉の秋を味わう。有島武郎が「も——一度秋の姿を見てから死にたい」と言った気持ちを思い出す。碓氷峠まで、娘の和子を連れて歩く。途中、尾崎行雄の別荘「莫哀山荘」による。言論の権威を重んずる習慣のない国に生まれた理想家（尾崎行雄）は、人一倍の重荷を背負っていかなければならない。モーレー卿の自叙伝を読み、その根柢にフランス文化のあることを改めて思う。

③「北支那の初夏」²²（全3章、第381頁～390頁、全10頁、日付なし）

作者（鶴見祐輔）は朝鮮半島を縦断し、瀋陽から北京に向かう。同文同種と互によく知ったようで、実際は中国は「見知らぬ国」である。中国と日本には精神的反撥と物質的乖離がある。中国の民論は把握しにくい。天津の駅で、奉直戦争の戦場に赴く兵士の軍用列車を見る。北京ホテルの窓からは、天壇が文鎮のように見えた。胡適が作者（鶴見祐輔）を訪れ、この窓から、天壇の姿に驚き、「見給え！天壇が！」と叫んだと言う。

4.2.2 紀行文について

紀行文について、『『思想・山水・人物』題記』（1928・3・31、前出）で次のように言う。

「原書にはあわせて31篇ある。作者が自序で言うように、『第2篇から第22篇までは、随想で、第23篇以下は旅行記及旅行に関する感想である。』私は第一の部分から15篇を選訳した。第二の部分からは、ただ4篇選訳しただけである。というのも私から見れば、作者の旅行記は軽妙なものであるが、しかししばしば軽妙に過ぎ、日刊紙上の雑録を読むように感じさせ、そのためにかえって翻訳する興味を失わせた。」

紀行文の多くを翻訳しなかった理由を、魯迅は上のように述べる。

注

¹ 「訪れてゆく心」は次の章目に分かれる。「1. 旅」「2. 旅」「3. 旅の収穫」「4. ターキントン」「5. 奈破崙の家〔奈崙破と誤植する〕」「6. ウィルソンの秘書官」「7. 雨のアトランタ」「8. ラ・フォレット〔本文にこの章目が抜け、目次による〕」「9. 新渡戸先生（上）」「10. 新渡戸先生（下）」

² 「曾遊山河」は次の章目に分かれる。「1. エドワード七世街（上）（下）」「2. カーゾン街の家」「3. モンチーチェロの山荘」「4. スタートンの二階家（上）（下）」「5. ウォーターローの獅子」「6. デルフトの立像」

³ 鶴見祐輔は次のように言う。

「大学時代は新渡戸先生の植民政策の講義を聴いて居たので、大分、帝国主義の方へひかれていた。新渡戸先生は内政については、デモクラシーの唱導者であられたけれども、殖民政策の実際に当られた関係上、可なり帝國的対外発展に同情を持って居られ、従って自分たちもこれに興味を持ちやすかった。」（「自由主義について」の第1章）

⁴ 鶴見祐輔は次のように言う。

「自分と異なる思想や団体の人々を頭ごなしに叩きつける性急な無寛容な精神であった。米国に居て、米国人の無寛容を笑っていた自分は、祖国に帰って同じような偏狭と無寛容とに驚かされた。」(『自由主義について』の第4章)

⁵ 「再談香港」(1927・9・29、『而已集』所収)でその様子が述べられた。

⁶ 『中国現代政治史』(池田誠、法律文化社、1962・10・1)、『中国国民革命——戦間期東アジアの地殻変動』(栃木利夫・坂野良吉、法政大学出版局、1997・12・18)、『中国国民革命政治過程の研究』(坂野良吉、校倉書房、2004・3・15)を参照した。

⁷ 魯迅は「馬上支日記」(1926・7・3、『華蓋集続編』所収)で次のように言う。

「国故を保存するとか、道徳を振興するとか、公理を維持するとか、学風を整頓するとか……心の中で本当にこのように考えているのだろうか。芝居をするとき、舞台のそぶりは、必ずや舞台裏の面目とは違っている。しかし観客は明らかに芝居だと知っているけれども、様が似ているのであれば、そのために悲しんだり喜んだりできる。そこでこの芝居は続けられる。誰かがそれを暴くと、彼らはかえって興ざめに思う。」(『馬上支日記』、1926・7・2、『華蓋集続編』)

「中国の一部の人、少なくとも上等人を見てみると、神・宗教・伝統の権威に対して彼らは、〈信じて〉〈従って〉いるのか、それとも〈恐れ〉〈利用して〉いるのだろうか。彼らが変化に長けていること、いささかも優れた品行がないことを見さえすれば、彼らは何ものも信ぜず従わず、しかし内心とは違ったそぶりをしようとしていることが分かる。虚無党を捜そうとすれば、中国では大変少ない。ロシアとは異なるところは次の点にある。彼らはこのように考えれば、このように言い、このようにする。しかし私たちののはこのように考えるけれども、あのように言う。舞台裏ではこのようにするが、舞台ではまたあのようにする……。こうした特殊な人物を、べつに〈芝居をする虚無党〉あるいは〈体面をつくろう虚無党〉と呼ぶ。」(『馬上支日記』、1926・7・2、『華蓋集続編』)

⁸ 魯迅と林語堂の関係について、「〈相得〉与〈疏離〉——林語堂と魯迅の交往史実及文化思考」(陳漱渝、『漢学研究』第13巻第1期、1995・6、底本は『魯迅論争集』(上)、中国科学出版社、1998・9)を参照した。

⁹ 「箴言と省察」(岩崎英二郎、関楠生訳、『ゲーテ全集』第13巻、潮出版社、2003・5・5、新装普及版〈1980・3・10初版〉)に次のような言葉が見られる。おそらく、このような言葉を指していたと思われる。

「立法家であれ革命家であれ、平等と自由を同時に約束する者は、空想家でなければ山師である。」(219頁)

「社会においてすべての人間は平等である。いかなる社会も平等の概念の上にしか築かれ得ず、自由の概念の上にはけっして築かれ得ない。社会のなかにわたしは平等を見出したいと思う。」(219頁)

¹⁰ また魯迅は、「老調子已經唱完」(1927・2・19、『集外集拾遺』)で次のように言う。

「ほかのところは知りませんので、上海によって類推するしかありません。上海では、もっとも権勢をもつものが一群の外国人であり、彼らに近づき取りまくものは中国の商人といわゆる知識をもつ人です。その輪の外は多くの中国の苦しむ人々であります。すなわち奴隷根性をもった下層の人々です。将来、もしも古い調子をなお歌い続けるなら

ば、上海の状況は全国に拡大し、苦しむ人々は多くなることでしょう。」

- ¹¹ 鶴見祐輔はフロリダでの紀行文「南の思い出」に次のように言う。

「人の乗るのを見ると、半病人のように可笑しかったこの椅子車も、乗てみると案外気持ちのいいものであった。それは、柔らかない籐で作った安楽椅子に車をつけ、後ろに自転車をつけて、これに黒坊が一人乗って、運転してゆくのである。」

食堂の描写には次のように言う。

「食堂は、成程すばらしく、大きかった。千七百の客をいれる広間で、しかも、食卓につく一人一人が、曰く因縁由緒のある、六ヶし屋ばかりとあるから、気の張ることである。幾百の黒坊の給仕が、晏子の御者のような顔をして、ならび立っている。」

こうした描写の中に、米国での支配者層としての白人と同じ視線を感じる。

しかし、「五 奈崙破の家」（「訪れてゆく心」）で『ハックルベリー・フィン』の物語を紹介する部分だけは少し違う。少年フィンが、奴隷のジャックを自由の身とするために、「一葉の筏舟に乗って、黒ん坊のジャックをかくまい乍ら、ミシシッピーを下ってゆく物語に、いたく心を牽かれた。」と言う。

- ¹² 「〈自由主義〉の精神」とは、市民的社会的自由を保護し拡大することを旨とする精神を指す。魯迅が前期、後期をつうじて、自由の価値を重視し、「〈自由主義〉の精神」をもっていたことを、私は「魯迅の『反自由主義』（『魯迅雑感選集序言』）についてのノート」（『野草』第101号、2018・10・1）で述べた。

- ¹³ 「小雑感」（1927・9・24、『而已集』所収）で次のように言う。

「ジョン・ミルは、専制が人々を冷嘲に変えさせる、と言う。

しかし彼は、共和が人々を沈黙に変えさせることを知らなかった。」

- ¹⁴ この点について、すでに2005年版『魯迅全集』第3巻注で、「旅ということ」に基づいている可能性と、カーライルの言葉をバーナード・ショウと誤って混同した可能性が、指摘されている。

「英国のバーナード・ショウには次のような意味の言葉があるそうです。世の中で最もいけないのは本を読む者です。彼はただ他人の思想・芸術を読むことができるだけで、自分を働かないからです。（中略）やや良いのは思考する者です。自分の生きる力を使うことができるからです、しかし空想であることも免れません。ですからさらに良いのは観察する者です。彼は自分の目で世の中というこの生きた本を読むからです。」（『読書雑談——7月16日在広州知用中学講』、魯迅）

「カーライルは人間を三種別して、第三流の人物は、読む人、第二流の人物は、考える人、そして、第一流の一番偉い人物は、見る人で、あるといった。我々の見識を築きあげるうゑに於て、本から得る知識が最も容易な、最低級な知識である。そして、見て知った見識は、考えて得た思想よりも、更に一そう貴い。それは、見ることは非常に困難なことであるからである。」（『旅ということ』、鶴見祐輔）

- ¹⁵ 魯迅は1925年5月に、『魯迅景宋通信集』二四（1925・5・30）においてこれまでの自らの思想的総括を紹介して、「〈人道主義〉と〈個人的無治主義〉という二つの思想の起伏消長であるのかも知れません」とし、矛盾撞着を認めている。

- ¹⁶ 「帝都の復興」は次の章目に分かれる。「1. 自由」、「2. 創造的精神」、「3. 都会生活者」、「4. 後年の歴史」

¹⁷ 魯迅の「文芸与政治的歧途——12月21日在上海暨南大学講」（『《新聞報》学海』第182、183期、1928・1・29、30、『集外集』）という講演の表題が、鶴見祐輔のこの表題「文学と政治との岐路」と酷似していることについて、「魯迅革命文学論に於けるトロツキー文芸理論」（長堀祐造、『日本中国学会報』第40集、1988・10・1、のちに『魯迅とトロツキー——中国における《文学と革命》』（平凡社、2011・9・25）の第2章として所収）に指摘がある。

¹⁸ 「魯迅革命文学論に於けるトロツキー文芸理論」（長堀祐造、前出）は、鶴見祐輔の「文学と政治との岐路」と魯迅の「文芸与政治的歧途——12月21日在上海暨南大学講」（前出、『集外集』）という講演について、題名が酷似するだけでなく、両者の「論旨が概ね一致する」とする。

しかしながら、魯迅の「文芸与政治的歧途——12月21日在上海暨南大学講」の内容の重点は次の点にあると思われる。文学者は社会の変化を敏感に感じ取り、現状に不満を抱く。のち社会の不満を背景に、革命者は社会の変革を目指し、革命を成功させ、革命者が執権する。そのとき、新しい政治権力者は政権の維持のために、なお現状に不満である文学者を弾圧する。これが19世紀から現在にいたる世界文芸の大勢である。また、革命が実行されているとき、文学を行う暇はない。革命が成功した後、文学者は理想と現実の不一致に苦しむ。軍閥支配の欠陥を論ずるのが革命文学者であり、軍閥支配を打倒するのが革命者である。

鶴見祐輔が言うのは、日本の政治家が文才を生かす環境がないことを言う。魯迅が言うのは、社会変革の時期に、社会に不満を抱く文学者と、変革を目指す革命者、およびその後新たに執権する政治権力者（以前の革命者）の関係を19世紀から現在まで歴史的に述べている。もしこのように言うことができるとすれば、私は、この二つの文章の「論旨が概ね一致する」とすることに疑問を感じる。

¹⁹ 「紐育より南へ」は次の章目に分かれる。「1. 人間は投影で生活する」、「2. 文豪ウェルスの旅行観」、「3. 主観の世界から蟬脱して」、「4. 紐育から華聖頓へ」、「5. 日本最良〔最良と誤植する〕」、「6. 米国一の美人」、「7. 健全な家庭」、「8. サヴァンナの並木道」、「9. 不老不死の霊泉」、「10. 川船の一日」、「11. 米国中の仙境」、「12. パーム・ビーチの豪華」

²⁰ 作者は、クリスマスの夜に、ワシントンからフロリダ行きの急行列車に乗る。北カロライナ州のあたりで、次のように言う。「停車場に駐る度に、町の道路の舗装していないのが、日本の町のような感じを与えた。黒奴の数の次第に増加していくのと、家々が多く且つ矮屋であるの目に目が着いて来た。」（330頁）

²¹ 「南の思い出」は次の章目に分かれる。「パーム・ビーチの夏」、「南への旅」、「素敵だなア」、「廊下三哩」、「テニスの熊谷」、「椅子車」、「黄金の砂上」、「帽子七十」、「青天井の舞踊」、「汽車と読物」、「映画の如く」、「植物界の王者」

²² 「北支那の初夏」は次の章目に分かれる。「1. 見知らぬ国」、「2. 奉直戦争」、「3. 天壇は文鎮のように」